

2020年9月17日(木)

老球の細道562号

偉大なコーチ「山崎純男」先生の思い出

会津バスケットボール協会 室井 富仁

福島県バスケットボール界の名将、福島西高校監督渡邊拓也先生から貴重なメールをいただいた。先生はこのコロナ禍で改めてバスケットボールの指導について考えようということで元長崎鶴鳴女子高校監督で全国制覇2回を果たした山崎純男先生の『チームを創る』を読んでいて、かつて私が山崎先生と親交があったことを思い出し、是非バスケットボール通信に山崎先生のことを書いてほしいという依頼を受けたのである。

山崎先生は元々長崎県の中学校保健体育教員でスタートし、1970年代に長崎市立桜馬場中学校で全国優勝を成し遂げ、全国の中学校にその名を轟かせていた。その後1980年代に鶴鳴女子高校に移り、ここでも全国優勝を2回成し遂げている。中学、高校と2つのカテゴリーで全国制覇を達成したのは今のところ桜花学園の井上氏と山崎先生の2人だけである。現在は長崎鶴鳴学園傘下の短大で指導をしていると風の便りに聞いている。

〈ちょっと前に、長崎県指導者講習会でトステイン・ロイブル氏が指導に訪れた時、トステイン氏と山崎先生が意気投合して話している時に会津の話が出て、山崎先生が私に電話をくれた時はびっくりした〉

1970年代から80年代にかけて日本の女子バスケットボール界で一世を風靡していた山崎先生については『月刊バスケットボール』などでいつも目にしていた。当時30代で野心に燃えていた私は、先生がどのような指導をしているのか興味関心を常に抱いていた。丁度その時に出会ったのが渡邊拓也先生が読んでいた『チームを創る』(山崎純男著・日本文化出版)だった。当時バスケットボールのコーチによる著書でこれだけ克明に記されたチーム創りの本はなかった。当然貪るように赤線を引きながら読んだ。1988年9月17日(土)付けの私の読書ノートに記された抜粋である。

「やれば報われる」と思わせるとは指導者の最も大切な役目である」

「努力が足りなくて敗れた者に、救いの手をさしのべてはならない」

「大筋のことだけ押さえて、他は放置する。集団を動かすコツである」

「強くなりたいと思っているときに最も強く、強くなったなあと思ったときは弱くなり始めているときである」

「チームの戦力分析は“もしも最低の状態で戦うならば”が基準となる」

「ミスはあとしまつの仕方によってミスでなくなる」

「強さは抵抗することから始まる。自滅するな、あくまで抵抗せよ」

当時、先生の著書を読むにつれて何としてでも先生にお会いして教えを受けたい気持ちが沸き上がってきた。そんな折、国体少年女子県選抜チームを率いて実業団日本一の共同石油(現JX)で合宿練習をするチャンスに恵まれた。幸運にもそこに山崎先生の鶴鳴女子高校も来ており、初めて対面することができた。第一印象は「変人!」と記憶している。〈続〉。